

## 子どもと芸術

### 「乳幼児の創造性への

### 影響とその還元」

### (個体編・共同体編)

### 「研究成果報告書」を

### 読む手がかり

私は芸術家でもなく、音楽家でもなく、画家でもなく、保育家ですの（「共同体編」終章・おまけ【保育者への提言】に応えた表現です）、私が言い表したいことは、事例を通して、事例に語ってもらった方がよいと信じているところがあります。そこで、読む手がかりとして、本研究に同行しながら私なりに感じたことを、和光保育園（千葉県）の出来事「愉快なお祭り」と結び、表現してみようと思います。

#### 始まりは偶然に

ある冬の入り口の北風吹く寒い日のことです。園庭の片隅に、とても愉快なお祭り（？）が催されました。何が愉快かと言いますと、そのお祭りが、さまざまな人の持ち味や振る舞い

が、まるで即興音楽のように混ざり合い、重なり合い、響き合って出来上がっていて、そこにいる誰もが、楽し気で、気持ちよさそうなのです。後から、担任の都さんに聞いた話ですが、そのお祭りは、計画通りに催されたものではなく、遊んでいる内にお祭りになっていっちゃった出来事だったのだそうです。

お祭りの渦の中心にいたのは、ちから組（3歳児）の子どもたちと担任の都さんです。子どもたちと都さんは、秋頃から、野草の数珠玉に糸を通して数珠玉ネックレスやブレスレットを作っていたそうです。ストローやビーズの装飾も加えて、それぞれお気に入りの作品がいくつも出来上がっていました。

最近では、数珠玉飾り作りの流行は少し落ち着いてきていましたが、久しぶりに数珠玉飾り作りをしたという何人かの子がいたので、都さんと子どもたちは、ジャブジャブ池（夏場は水遊びに使用するが、そのほかの季節は縁側の延長で使っている）の淵のあたりで数珠玉飾り作りを始めました。

すると、ほなちゃんがストローの先がスプーンになったものを見つけて「これ、お祭りのかき氷食べるやつじゃん」と言いました。そこから、好きなかき氷の味や、お祭りで売っているもののお話が盛り上がってきて、いつしか「かき氷作りたい！」「ポテト作りたい！」という気運が育ってきたそうです。そこで都さんは「こ

のあいだドングリキャンディを作ったセロハンが残っているから、それが使えるかも！」と子どもたちに提案しました。すると「いいね！」と子どもたちも乗り気になり、折り紙でコップを作ったり、セロハンを細かく切ったりと、かき氷やポテト作りが盛り上がっていました。

しかし、この日は北風が吹く寒い日ということもあり、都さんは『北風小僧の寒太郎』の歌を「お祭り小僧の寒太郎」と言い換えながら替え歌を歌い始めました。都さんの心の中では、寒い中でかき氷を作るといって、ちょっとナンセンスな出来事を楽しんでしまおうという気持ちで働いたのだそうです。

すると、一緒に作っている子どもたちも、その歌を「へんなの」と言いながらも歌い始め、なんだかいい雰囲気になってきたので、都さんは「ギター弾いちゃおっか？」と提案すると、「いいね！」「いいね！」と子どもたちもますますノリノリになってきたのだそうです。

都さんがギターを弾いて、改めて「お祭り小僧の寒太郎」を歌い始めると、みち君やたつ君が部屋の中から空き缶太鼓や椅子を持ってきて、バチ（新聞紙をガムテープで巻いたもの）で太鼓のように叩き始めました。

ますます楽しい気な雰囲気盛り上がってきて、周りにいた子どもたちも椅子やバチを部屋から出してきたり、まほちゃんはバチをマイクに見立てて歌い始めたり、ペットボトルマラカ

スを持つてくる子がいたり、と、どんどん大きな渦になってきて、その楽し気な雰囲気や歌声に誘われて、いつしか池の周りに小さな人だかりが出来上がっていました。

集まった子どもや大人も、手を叩いたり一緒に口ずさんだりと、その場の雰囲気とともに楽しんでいきます。一曲歌い終わると、そこにいるみんなから自然と「ヒューヒュー」「イエーイ」と歓声が上がりました。

### 自分たちで最高のステージを演出していく

すると、いとちゃんが「楽竹団らくなげだんみたいに、みんなから見えないところから出てきちゃおうよ」と提案しました。いとちゃんは、両親が主催する房総楽竹団（手作り竹楽器で演奏をする市民楽団）のメンバーとして、演奏に参加している経験の持ち主なのです。

その提案に「いいね！」と、たっ君やみち君は即座に応えました。たっ君も楽竹団の演奏に参加したことがあるし、みち君は、お客さんとして演奏を見たことがあるのです。

都さんや他の仲間たちは、すぐにはイメージが出来なかったようですが、いとちゃんやたっ君やみち君に誘われるように、部屋の中に入っていました。

後から聞いた話ですが、登場や演奏を始めるタイミングを打ち合わせたり、円陣を組んで、

「エイエイオー！」をしたのだそうです。

さつきまで演奏の周辺で手を叩いたり、歌を口ずさんでいた人たちも、「何かもつと面白そうなことが起こりそうだぞ！」と期待を膨らませながら待っています。

そしていよいよ、部屋の陰から演奏に参加する子どもたちと都さんが出てきました。なんだかみんな嬉しそうだし、誇らしそうな顔をしています。待っていた人たちも「きたきたきた！」「ヒューヒュー」と、はやし立てています。いつの間にか、頭にタオルのハチマキもしています。それぞれに位置につく中、たっ君はさつき作ったかき氷やポテトを指差し、「食べながら聞いてください」とアナウンスをします。それに応えていつちゃんは、おいしそうにかき氷を食べる振りをしながら聞いてくれようとしています。

そして、おもむろに真ん中の椅子の上に立つたまほちゃんが、バチのマイクを口元に向けて「みなさん、用意はいいですか？」と聞くと、観客のみんなも「いいよ！」「い

いですよ！」と応えてくれたので、たまほちゃん

は「いっせーのーで、どうぞ！」と都さんの方を向いて合図を送ります。すると都さんが「ワンスリースリーフォーツ」と、ギターの伴奏とともに、「お祭り小僧の寒太郎」を弾き語り始めました。たまほちゃんもそれに合わせて嬉しそうに歌い始めます。

その後ろで、いとちゃん、たっ君、みち君が太鼓を思い思いに叩いています。その後ろには、マラカスを振る子、たまほちゃんのようにバチをマイクにして歌う子がいます。

「凄いな！」と驚いたのは、演奏を始めた瞬間に、曇り空だったはずの空から、一瞬陽の光が差し込んできて、演奏する子どもたちを照らしてくれたのです。それには、観客にいたトクマルシューゴさん（音楽家、子どもと芸術研究



で来園していた)も「おー ライティングー!」と驚きの声がこぼれ出てしまっていました。

なんだかとても愉快です。そこにいる人たちが、その場に生まれたうねりのようなものに巻き込まれながら、影響を受けながら、それぞれが、各々に楽しもうという気持ちだが、彩り豊かに表現されて、その振る舞いが、またうねりを大きく育てていつているような感じですよ。

### 文脈を持った時間

それはまるで、そよ風のような出来事が園庭の片隅に溜まってきて、つむじ風のような小さな渦を立ち上げ、そこへ巻き込まれ流れ込んでいく要素が多くなっていくにしたがって渦が大きくなって、渦が大きくなるほどに、巻き込み引き込んでいく力も大きくなっていく。いつしか、巻き込まれ流れ込んだものの振る舞いや感情が、上昇気流のように練り上げられて集約されていく。それは、うねりと表現もできますが、漠然とした時系列的な気運の高まりというよりは、一つの物語のような文脈を持った時間の流れです。

この文脈を持った時間を創っているのは、ちから組の子どもたちと都さん、そして、観客としてともに口ずさみながら手を叩いて、聞いてくれている人たちです。

ここで、あえて強調したいのは、この時間を

創り出しているのは、誰かの一方的な指揮や指示によるものではなく、そこにいた人たちそれぞれの主体的な選択や決定が居方や振る舞いに現れ、その響き合いが、お祭りから合奏へと発展していく文脈を持った時間を創り出しているのです。

### 違いが文脈を彩り、豊かさになっていく

ここでいう「主体的な選択や決定」は、決して個々バラバラに切り離されたものではなく、この場に流れるうねりや文脈から大いに影響を受け与え合うような、呼応関係にあります。

例えば、「お祭り小僧の寒太郎」の合奏が繰り返されながら盛り上がっていく事柄の中で、歌声や音色に引き寄せられ突き動かされたある子は太鼓を叩き、ある子はマイクを握り歌い、ある子はマラカスを振り、ある子は座り手を叩いて口ずさみ……と、同じ歌声や音色に触発されているにもかかわらず、やってみたいと思う選択や決定の違いが出てくるのです。

しかし、その違いが、合奏の彩りを益々豊かにしていき、その彩りの豊かさにまた触発されて、叩く人や歌う人や振る人が増えていくのだけれど、その叩き方、歌い方、振り方、立ち方、座り方に違いが現れて、演奏の彩りや豊かさとなって盛り上がっていき、文脈自体を育てていくのです。そして、その彩り豊かに育った文脈

から影響を受け、またそれぞれの主体的な選択や決定のバリエーションが広がっていくのです。

### どんなあり方も抱擁してくれる

それは、熱心に演奏する人だけでなく、マイクやマラカスを持つけれどやらないとか、少し離れたところから、身体を揺らしながら聞いている人たちの振る舞いにも現れている訳ですが、そのすべての表現が抱擁されているような雰囲気を感じています。

そしてさらに言えば、演奏の途中で立ち去っていく(輪から離れていく)子や、遠くの焚火端で暖をとっている子、縄跳びや砂遊びをしている子たちもいてくれることによって、園庭全体に濃淡が生まれ、この演奏が盛り上がっていく文脈の中に活きている(ノリノリで楽しんでいる)人たちの輪郭が際立っていくと言いますか、演奏を楽しもうという目的意識をより明確に表現しやすくなっているように感じます。

つまり、やりたくない人はやらなくていい訳で、叩きたい人が叩き、歌いたい人が歌い、聞きたい人が聞き、座りたい人が座り、立ちたい人が立ち、去りたい人が去り……と、それぞれの主体的な振る舞いによって生まれた多様なあり方が、どんなあり方も抱擁してくれる居心地のよい雰囲気を生み出しているのです。だから、安心して自分なりの表現が出来るのです。

## お昼ご飯へ向かって移ろっていく

さて、段々と、お昼ご飯のハヤシライスの匂いが強く感じられるようになってきました。そこにいる多くの人のお腹もすいてきましたし、身体も冷えてきましたし、疲れてきたし、何度も繰り返し演奏するうちに、飽きてきた子も増えてきました。

お祭りの演奏会を生み出した共同体は、少しずつ崩れていきます。それを加速させる一因になっているのは、焚火端から漂ってくる甘い匂いです。保護者からもらったバターナッツ・スクワッシュ（南瓜）を焚火で焼いてくれている子どもたちが、集まった人たちに「どうぞ」と配ってくれています。また、新しい小さな渦が生まれ始めているのです。

縁側や部屋の中では、小さい子のお昼ご飯の準備が始まり、それにつられるように、気の早い子や、お腹がすいた子、手持ち無沙汰な子が部屋へ上がっていきます。そうやって、お昼ご飯の景色が少しずつ園全体に配置されていくことで、どんどん遊びの潮が引き、お昼ご飯の潮が満ちてくるような流れが色濃くなっていきます。

それはお昼ご飯へ向かっていく文脈ですが、その文脈が、またそれぞれに影響を与え、それぞれの主体を通して表現や行動を変化させていくのです。

くのです。

## 地球の大きなうねりや文脈と響き合う

寒い一日だったから、焚火や部屋の暖かき、バターナッツやハヤシライスの温かきが身に染みます。先週末までの暖かな日和があったから、今日の寒さが際立ちます。今日の寒さがあるから、暖かくなつていく楽しみが生まれます。

冬が深まってくると同時にビワの花が咲き、ミツバチが蜜を集め受粉し、ビワの実りを助けています。冬の入り口だけれど、すでに春の準備が始まっています。

暑さから寒さに向かい、また暑さに向かつていく円環的な流れの中の今日を生きています。自分たちではどうしようもない地球の大きなうねり、文脈、物語、流れの中にいて、それに促されたり、支えられたりしています。

寒さの中でかき氷を作るなんていうナンセンスさが、寒さを前向きに楽しみ活かすかのような「お祭り小僧の寒太郎」の合奏を生み出し、その盛り上がりや文脈を育てていきました。うねりや文脈に活かされつつ、自分たちの振る舞いが、自分たちなりのうねりや文脈を創り出し、育てているという手応えを誰もが感じています。

少し飛躍しすぎかもしれませんが、私は、このような出来事を積み重ねていくことで、個々

別々バラバラな「自分よがり主体」ではなく、所属する小さな共同体、地域、社会、世界と拡大していった、地球や宇宙全体と「響き合う主体（周囲とつながりを持った柔らかな主体）」を育んでいくのではないかと考えています。

以上が、私が保育家として、本研究からインスピレーションし表現してみたくなったことです。自分なりに、本研究と深く響き合う事例なのではと考えていますが、皆さんがどう感じられるかは、ぜひぜひ！「研究成果報告」を開き、確認してみたいところです。

保育・子育て総合研究機構研究企画委員会委員

鈴木秀弘

「子どもと芸術『乳幼児の創造性への影響とその還元』  
(個体編) トクマルシューゴ・音楽家  
(共同体編) 齋藤紘良・社会福祉法人東香会理事長  
「研究成果報告書」は、HP あおむし通信に掲載しています。



<https://www.zenshihoren.or.jp/activity/ic/kenkyu.html>